

をして、多くは失敗や不安に陥った。『書札礼「付故實」』の条目では正誤に峻別しようとしても、判断でき兼ねる躊躇いを「思煩之時」と呼ぶ。大禮を右側に、無禮を左側にして、もともと安心を保証する筈であった思想の大義でも、逆に良し悪しの差別は悩み、不安となることがよく伝わっている。別書『書札作法書』でもこの事情を「書札煩ハシキ」とことと称している。やはり、人類文化の進化中、千年余りの伝授に秘められてきた「煩わしさ」という心性について議論したいものだ。

(国際日本文化研究センター教授)

- 一 共同研究『『かのように』という原理で形成してきた文通—『文書』概念や、その様式、記号、表象、意図性』(Formation and Changes of Correspondence—Texts as Seen in the Principle of 'As If—Transpositions: The Term Monjo, Its Styles, Signs, Representations, and Intentions) の紹介。
- 二 日本ではよく『文明への不満』と訳される。一九三〇年刊。
- 三 一九三〇年刊。
- 四 藏人・職事の文書を司る規定や模範が主な趣旨内容。源通具(一一七〇—一二二七)の名も見られるので、平安時代にかなり遡る規範が伺えると思われる。

「多文化間交渉における〈あいだ〉の研究」(通称  
〈あいだ〉研究会) レポート

村 中 由美子

二〇一六年四月から二〇一八年八月にかけて、共同研究会「多文化間交渉における〈あいだ〉の研究」が開催された。筆者は、二〇一六年四月から日本学術振興会特別研究員(PD)として日文研に所属することになったため、この研究会に参加させていただく幸運に恵まれた。本研究会は、二〇一三年から二〇一六年にかけて稲賀繁美氏の主催で行われた「海賊史観における世界の再構築」で俎上に載せられた問題系を継承するものであり、〈あいだ〉研究会からしか参加していない筆者は本研究会レポートの執筆者として甚だ不十分ではあるが、三年間の研究会が結実した論集『映しと移ろい——文化伝播の器と蝕変の実相』(花鳥社、二〇一九年)にも触れつつ、本研究会のレポートとさせていただきます。

一 多彩な参加者を通して繰り広げられる化学反応  
私事で恐縮だが、筆者は二〇〇九年九月から二〇一六年四

月までベルギーとフランスに留学しており、研究会参加のタ  
イミングはフランスで博士論文を提出した直後であった。言  
うまでもなく彼の地においてフランス文学は「国文学」であ  
り、フランスの大学のなかでもとりわけ国文学研究機関とい  
う色合いの強いパリ第四（ソルボンヌ）大学で論文を提出し  
た（大学統合により、現在では第四という数字は消えて単に  
「ソルボンヌ大学」と呼ばれる）。六時間の口頭試問を経て無  
事に論文は受理されたが、審査員の一人であったパリの名  
誉教授の言葉が今でも脳裏に焼き付いている。筆者の論文は、  
作家マルグリット・ユルスナール（一九〇三—一九八七）が  
とくに戦間期に執筆した作品群を、「秩序への回帰」と呼ば  
れる当時のフランスの芸術潮流に位置付けようとする試みで  
あった。ところが、日本人が「ネオ・クラシズム」という  
問題を扱うことに対して、ヨーロッパの古典もわかっていな  
い外国人には分不相応だと言わんばかりだったのである。ユ  
ルスナールは日本に関するテキストも書いているのにどうし  
てそちらのテーマを選ばないのかと皮肉まじりに問われ、他  
意はなかったのかもしれないがフランスを代表する教育・研  
究機関の排外主義的な一側面をひしひしと感じた。

このような過程を経た筆者は、恐れ多くも、日文研もし

かしたらパリ第四大学の日本版、つまり国粹主義的かつ排他  
主義的なのではないかというイメージを持っていた。日本研  
究を志す外国人研究者が筆者のような思いをしているのでは  
ないかと危惧し、そういう人がいたら相談に乗ってあげよう  
などと不遜にも思いつつ、戦々恐々と初回の研究会に参加し  
た。その不安が杞憂に終わったのは言うまでもない。

本研究会は、各年度の前半に集中して行なわれ、そこには  
毎回二〇名ほどの参加者が日本全国および海外から集結し  
た。「文学研究」という枠のなかでこれまで研究を続けてき  
た筆者にとって、多士濟々な顔ぶれというのが、まずこの研  
究会の一番の魅力であった。論文集『映しと移ろい』の執筆  
者は総勢四三名にもほぼる。専門は美学、美術・芸術史学か  
ら社会学、教育学、科学哲学、宗教学、比較文学まで実に  
様々であり、美術館の学芸員や陶芸家もいらっしやる。へあ  
いだ」というテーマをめぐって毎回広範な議論が繰り広げら  
れるため、ついてゆくのも一苦労だったが、各人の発表のあ  
とに稲賀氏のコメントを拜聴できるのがこの研究会の醍醐味  
のひとつだったように思う。論点が整理され、それらの点が  
どのように展開されるかという道筋の数々が提示され、縦  
横無尽に話が広がり稲賀氏の博覧強記ぶりに圧倒されつつ

も、頭のなかで活性化されて帰途につくのが常であった。勤務先大学で教育や校務を行いながら、同時に自分自身の研究を進めるのは至難の業であるが、年度の前半、月に一度でも京都の稲賀氏の研究会に集って多様な参加者たちと接することで、研究のベクトルを失わずにいくことができている。

## 二 能動でも受動でもない、中動態——数々の研究発表のなから

本務先の授業と重なることもあり限られた回しか参加できなかったものの、そのなかでもとりわけ印象に残っているのが「中動態」をめぐる二〇一六年の第五回研究会である。ゲストスピーカーの森田亜紀氏は、倉敷芸術科学大学でかつて教鞭を取られており、実技として芸術を志す学生たちを間近で見守ってこられたそうだ。そのような中で目にされてきたひとつの作品が出来上がるということ、中動態の概念を通してお話しくださった。制作者が「つくる」(能動)のではなく、なにかが「つくられる」(受動)のでもなく、そこに作品が「現れる」のである。稲賀氏は、外科手術がとりわけうまくいっているときに医者がメスを動かしているのではなく、くなくなものに「動かされている」感じがするらしいという

例や、ご自身の合気道のご経験を踏まえて補足して下さったように記憶している。論文の執筆が首尾よく進んでいるときや(減多にない)、オーケストラで奏者が一体となって同じ方向に向かって演奏を進めてゆくときの、なにもものに動かされているような、でもその力が何であるかはわからないあの感覚、それがサンスクリットや古代ギリシア語、ラテン語に見出される中動態につながるということに目が開かれる思いであった。そしてその態は、フランス語やドイツ語の再帰動詞(代名動詞)にその名残が見られるし、日本語でも「山が見える」と言う。なぜ中動態に惹かれたのかという点、実際のな理由があったのも事実である。その年、筆者は東京都内の、世界のあらゆる言語を学ぶことのできる大学で、アラビア語や中国語を専攻する学生たちに第二・第三外国語としてフランス語を教えていた。代名動詞は教えるににくい。動詞の活用になじみのない学生にとってはそれだけでも一苦勞なのに、なぜ再帰代名詞までくっついてくるのか?筆者は、中動態の概念を学生たちに滔々と披瀝した。彼らは一様にぽかんとした表情をしていたが、ことばの勉強を続けるなかで、言語の体系のなかに人間の営みのありようが刻まれたこの一例をいつか思い出してくれたらと願う。

また、この中動態は様々な広がりを持つ。稲賀氏は、論集第六部のエピグラフでハンナ・アレントに言及している。アレントが「犯罪に〈仕方なく同意する〉態度を、強要された暴力への屈服ではなく、同意の〈意志〉表明だとする判断を示した」ことに対して、稲賀氏は「彼女は意志と責任によって構築されるべき社会正義（ないし神学的理論としての善）の理想を手放さないがために、敢えて〈不本意な同意〉（という曖昧で「無責任な態度」）を、犯罪行為から免責しなかったのではないか」と述べている。この〈不本意な同意〉とはまさに中動態的な態度である。責任を「取る」でもなく責任を「負う」でもないその〈あいだ〉、白黒つけることなく中立的な立場で物事を判断することは中動態的であると言えそうだ。フランス語の名詞 *complice* は、主人と客人の両方を示す。主人と客人は逆の関係だが、主人である人もときには客人になるし、客人だった人が主人になることもある。二項対立として考えている二つの要素が、「主客転倒」という言葉もあるように、ひっくり返ったり、実は対立した二項ではなかったり、補完し合ったりするような場合も考えられる。

### 三 「翻訳」について——筑波大学での研究会 (EASJ、E—ロップ日本研究協会) に参加

では、翻訳の場合はどうだろうか。『映しと移ろい』第六部で、片岡真伊氏はアンガス・ウィルソンのみだ英訳版『細雪』最後の二行から「能動・受動の二元論を越える契機」、つまり「〈中動態〉ともいふべき様相」を浮き彫りにしている。彼女の論考は以下のように始まる…「ある小説が異なる言語に翻訳されるとき、翻訳の原典はどのように映され、また移植先の言語へと移ろうのだろうか。そしてある作家が、その小説の翻訳に触れる時、作家はいかなる要素に発想源を見出すのだろうか。」第二次世界大戦後、英語圏において川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫といった日本人作家の著作が次々と英訳出版された。イギリスの作家、アンガス・ウィルソンは英訳された『細雪』の最後の二文に、西洋の小説には見られない滑稽さを読み取り、行き詰まりを迎えていた西洋的な小説の型を打破する契機をそこに見出した。ところが、ウィルソンの読んだエドワード・G・サイデンステッカーによる英訳では、その部分において主語の取り違えがある上、小説中の和歌を一行空けた上で改行し、さらにイタリックで記すという原文とは異なる表記が取られていた。

ウィルソンが『細雪』に読み取った、西洋の小説にはない「異質性」とは、翻訳の過程で生じた原文との差異に立脚したものであったということ、片岡氏は説得的に論証している。本稿から、翻訳という事象を研究対象とする際、元のテクストと、翻訳されたテクストのみではなく、そのへあいだで、すなわち翻訳中に起こっていることにも注意を向けなければならぬという重要な示唆を得ることができた。

この研究会が出発点となり、片岡氏、ゴウランガ・チャレン・ブラダン氏（日文研機関研究員）と筆者でパネルを組織し、二〇一九年九月一日から二日間に渡って開催された第三回 EALS 日本会議で発表を行った。パネルのタイトルは「翻訳を通して日本文学を読む——世界文学としての日本文学への三つの視座」であり、ディスカッサントとして稲賀氏にもご登壇いただいた。明治時代から第二次世界大戦後にかけて、日本文学がどのように紹介、受容されたかという問題、またその作品の翻訳の過程や、受入地での文化的背景にに応じて受容にどのような影響があったか等について、ゴウランガ氏が『方丈記』の受容とバジル・バンティング作“Chomei at Toyama”を、村中がアーサー・ウェイリー訳『源氏物語』のマルグリット・ユルスナールとヴァージニア・ウルフにお

ける受容を、片岡氏が『細雪』英訳出版におけるタイトル変遷の過程を題材に論じた。それぞれの発表を通じて翻訳をめぐる諸問題が浮かび上がり、今後さらにそれらの検討を進めるつもりである。

〈あいだ〉研究会によって、このように専門領域の異なる個々の研究者の〈あいだ〉がつながり、それを契機にあらたな〈あいだ〉が生み出されようとしている。前述のフランス人名誉教授に、ぜひこの研究会のことを報告したい。

（白百合女子大学講師／

国際日本文化研究センター二〇一九年度共同研究員）

（一）本レポートの執筆後、二〇二〇年二月一六日から一七日にかけてとりまとめ研究会、また初日に花鳥社の編集者である大久保康雄氏をお迎えして論集の出版記念会が行なわれ、盛況であったことを追記する（二〇二〇年二月一八日記）。